

電波政策懇談会（第4回会合） 議事概要

1 日時

平成21年3月10日（火） 14時00分－15時30分

2 場所

総務省11階 第3特別会議室

3 出席者（敬称略）

（座長）

土居範久（中央大学）

（座長代理）

村上輝康（（株）野村総合研究所）

（構成員）

麻倉怜士（津田塾大学）、岩浪剛太（（社）デジタルメディア協会）、大森慎吾（（独）情報通信研究機構）、黒川和美（法政大学）、後藤幹雄（日本文理大学）、土井美和子（（株）東芝研究開発センター）、所真理雄（（株）ソニーコンピュータサイエンス研究所）、徳田英幸（慶應義塾大学）、服部武（上智大学）、林俊樹（メディア・コンサルタント）、廣瀬弥生（国立情報学研究所）、藤原洋（（株）インターネット総合研究所）、森川博之（東京大学）、オヌル・アルトゥンタシュ（山本構成員代理）（（株）トヨタIT開発センター）、山本隆司（東京大学）、若尾正義（（社）電波産業会）

（総務省）

桜井総合通信基盤局長、吉田電波部長、安藤総務課長、渡辺電波政策課長、野水電波政策課企画官、新田電波政策課企画官、村上電波政策課統括補佐、佐々木基幹通信課長、竹内移動通信課長、坂中移動通信課企画官、瀬戸移動通信課推進官、鳥巢衛星移動通信課長、杉浦電波環境課長、白江国際周波数政策室長、山内電波利用料企画室長

4 議事

1. 開会

2. 議題

(1) 2010年代の電波利用サービスやシステムの将来像について

(2) 電波利用システム将来像検討部会の検討状況について

3. その他

4. 閉会

5 議事概要

- ・資料 4-1「電波利用システム将来像検討部会におけるこれまでの検討状況」に基づき、事務局より説明があった。
- ・資料 4-2「ワイヤレス関連市場の将来市場規模の試算」に基づき、後藤構成員より説明があった。

6 質疑応答

各議題について以下のような意見及び質疑応答があった。

○3点ほど。1点目は、距離的にショートレンジとロングレンジの無線システムについては記載されているが、中間のミドルレンジ、例えば無線LANのようなものについて記載がないように思われるが、そこはどう考えているのか。2点目として、資料に挙げられている13項目は「技術」と「利用」を分けるべきではないかと思う。3点目として、既存3分野のうち、「衛星」を利用する電波システムは通信だけでなく観測や放送などもあるので、「衛星通信」という用語はふさわしくないのではないか。「衛星利用」ぐらいが適切ではないか。

→1点目は、言葉としては出ていないが中身としてはワイヤレスブロードバンドなどの中に内包されているものと考えている。2点目は、ご指摘の通りであり、34ページにあるように、コグニティブ無線、ソフトウェア無線、ワイヤレス認証などを技術として位置づけ、それ以外を利用として考えている。また、今後、体系的に整理の上、取り組むべき研究開発課題を検討することとしてご理解いただければと思う。3点目は、何かいい意見があれば伺いたい。

→資料の近距離ブロードバンドという項目は、多分、ショートレンジ系のブロードバンドというイメージかと思う。であれば、もう少しミドルレンジ系の中間的なイメージがあるべき。

→部会では、構成員からの意見でもショートレンジよりも距離のある通信についても意見が出ており、用語では明示されていないが、このカテゴリーに基本的に入ると理解している。表現の方法については、今後検討したい。

○技術というのは技術が単にあるわけではなく、目的があってそのための技術があるわけだから、使い方の部分をもう少し分かりやすく見せた方がいいのではないか。また、例えばインテリジェント端末などのカテゴリーは他と比べて矮小化しているように感じられる。見せ方としては、安心・安全という目的があり、そのためのシステムとしてインテリジェント端末があり、システムを構成する技術として無線チップや近距離ブロードバンドなどの技術があるという三段論法の方が分かりやすいのではないか。

その辺をまとめた大戦略が欲しい。

→戦略は非常に重要だと認識しているが、さしあたって、まずサービスを明らかにするという作業をしたというところまでが今回の資料である。また、戦略を明らかにするのはおかしいだろうという話もあり、現在の形にとどめているところ。

→戦略を考える際には、技術、利用、戦略という三角形でなるべく見ながら、その中でも技術戦略を考えないと、日本で国際競争力が強い企業っていうのはなかなか育ってこないのではと思う。

→全てを平等に、というのも一つの戦略ではあるが、何らかの形で我が国としてどこに重点を置くか、考える必要はあるかと思う。

○一つ目、標準化のスケジュールについて、技術開発の目指すべきターゲット、マイルストーン的なポイントをプロットしてもらいたい。特にネットワークロボットなどでは日本が標準化の部分で先行している分野なので、そういう押さえるべき時期が示されると、

非常によい。2つ目として、技術が進歩しても、社会制度のイノベーションが追いつかないと、うまく技術が社会に浸透できないので、キーワード的にそういった部分も入れていただくと、技術を社会に出す時に、障壁が減るのではないかと思う。

○予測される未来像をシーズ側、ニーズ側双方から絵にして、次回までに間に合えば、ご提案したいと思うがどうか。

→そういうご提案は大変有効ではないかと思う。よろしくお願ひしたい。

○市場規模の予測だが現在25兆円で10年後に80兆ということは、10年間で55兆しか増えないということで、拾い方が少ないのか、この倍ぐらいになると個人的には思っていた。

→いかに戦略的意志が働くかという部分で前段の数字が大きく変わる可能性はあるだろう。その部分は、今後の議論になるかと思う。

→年率9.3%の成長は、合理的な説明が出来る範囲でということであれば、結構いい線なのではと感じている。

→情報通信では、個々の装置やサービスの値段はどんどん下がってきており、それを含めて考えると、単に右肩上がりの線を書いていいのかな？という逆の心配もちょっとある。とはいえ、我が国としては右肩上がりで行きたいという思いはあるので、それならばどうするかと考えた場合、やはり海外の市場動向まで含めて、海外の市場をどこまでとるかということを入れていけば、ひょっとしたらこの資料以上にいくかもしれない。

→気になったのは、電波の市場が、既存の他の技術の市場を奪う分も含めて伸びてこの金額だという点。そういう意味でも電波分野への期待は大きいので、想定していたことからすると、ちょっとショックだった。

→国際市場をどこまでとりに行く、という言い方をするとよくないので、世界市場がどれだけ伸びるかというデータを占めして、国としては世界がこれだけ伸びて日本がこれだけ伸びるという形にしてはどうか。また、ICTはGDP比10%ぐらいの産業ではあるが、ここが頑張ると波及効果が多分45%ぐらいあるので、現在の予測にある新サービス以外に、これによって起こる波及効果の市場を加えると、GDPとして見た場合の、本戦略の価値というのが出てくるのではないか。

→データは色々なところから出ているが、無線のトータルの市場のデータは残念ながらないので、今回この機会に、途中の生産活動や海外での活動まで含めて、精密な分析が出せれば、非常に役に立つものになるのではないか。

→ここに書かれていることは、どちらかというところ、ワイヤレスで今までの市場がここまで手堅くいきますということについてであって、新しくワイヤレスによって作り出される部分について足りないと思われるので、そこも市場のなかで考えるといいと思う。

7 今後のスケジュール

- ・今回頂いた意見等を踏まえ、部会にフィードバックさせていただき、部会で検討を行い、次回懇談会で報告を行う。
- ・第5回懇談会は4月13日（月）10:00からの開催を予定している。会場については現在調整中であり、決定次第改めて連絡する。

以上